

『モモ』

ミヒヤエル・エンデ／著 大島 かおり／訳
岩波書店(1999年)



都会に暮らす人々は、毎日時間に追われてイライラせかせか大忙し。人々が慌ただしく暮らすには理由がありました。なんと時間どろぼうなる悪党たちが人々から時間を奪っていたのです！そんなどろぼうたちに立ち向かうのは“聞く”という能力に長けたモモという名の不思議な女の子。彼女は奪われた時間だけでなく、人々に人間の真価を取り戻すことができるのでしょうか…？

生きる上で本当に大事なものは何かを問う、不朽の名作ファンタジー。

『あしながおじさん』

ウェブスター／作 遠藤 寿子／訳
岩波書店(2002年)

孤児のジルーシャはある人の援助のおかげで、大学にいけることになりました。ジルーシャは援助してくれる人の名前を覚えてもらえません。そこで、その人のことを「あしながおじさん」と呼ぶことにしました。「あしながおじさん」のおかげで、ジルーシャの大学生活はとても豊かなものになりました。ジルーシャが毎月送るお礼の手紙には、ユーモアと愛があふれています。

『ティーパーティーの謎』

E・L・カニグズバーグ／著 小島 希里／訳
岩波書店(2000年)



背景の異なる4人の少年少女が、お互いを理解しながら成長する姿を生き生きと描いた物語。多少構成が複雑な部分もありますが、アメリカで最も優れた児童文学に与えられるニューベリー賞を受賞しているというだけのことはある、読み応え抜群のお話です。読んでいる間は魅力的な登場人物にわくわくし、そして読後はじんわりと心が温かくなる1冊です。

『ふしぎの国のアリス』

ルイス・キャロル／作 田中 俊夫／訳
岩波書店(1982年)



アリスは川のそばで、とても退屈していました。すると、アリスのそばを、チョッキを着た白いウサギが懐中時計を持って大慌てでかけ抜けていくではありませんか。ウサギ穴に飛び込んでいったウサギを、アリスも追いかけていきます。そしてアリスはふしぎな世界に迷い込み、そこでさまざまな出会いや経験をするのでした。



『トム・ソーヤーの冒険 (上・下)』

マーク・トウェイン／作 石井 桃子／訳
岩波書店(2000年)



トム・ソーヤーはミシシッピ川沿いのちいさな村に住む男の子です。父母をなくし、年とったポリーおばさんに育てられているわんぱくな少年です。トムたちの日常がのびのびと描かれています。

いつも楽しく遊んでいるトムですが、ある日、トムは親友のハックルベリーと墓地で殺人を目撃してしまいます。

『トムは真夜中の庭で』

フィリパ・ピアス／作 高杉 一郎／訳
岩波書店(2001年)



夏休み、家族と離れ、おじさんのアパートで過ごすことになったトムは、憂うつでした。邸宅を区切っただけのアパートには、庭も広場もないからです。ある晩、ホールの大時計が13時を告げた時から、トムの不思議な体験が始まりました。何もないはずの裏庭への扉を開けると、すばらしい庭園が現れたのです。トムは毎晩部屋を抜け出し、庭園にいるハティと遊びました。

大時計がつなぐ、トムとハティの「時」を超えた友情物語です。